

狩りの使ひ

昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩りの使ひに行きけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使ひよりは、この人よくいたはれ。」と言ひやれりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩りに出だし立ててやり、夕さは帰りつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。

二日といふ夜、男、われて、「逢はむ。」と言ふ。女もはた、いと逢はじとも思へらず。されど、人目繁ければ、え逢はず。使ひざねとある人なれば、遠くも宿さず。女の閨近くありければ、女、人を静めて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見出だして臥せるに、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて、人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らぬに帰りにけり。男、いと悲しくて、寝ずなりにけり。

つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明け離れてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来し我や行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てか覚めてか
男、いといたう泣きて詠める、

かきくらす心の闇に惑ひにき夢うつつとは今宵定めよ
と詠みてやりて、狩りに出でぬ。

野に歩けど、心はそらにて、今宵だに人静めて、いと疾く逢はむと思ふに、国守、斎宮頭かけたる、狩りの使ひありと聞きて、夜ひと夜酒飲みしければ、もはら逢ひごともえせで、明けば尾張の国へ立ちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せど、え逢はず。

夜やうやう明けなむとするほどに、女方より出だす杯の皿に、歌を書きて出だしたり。取りて見れば、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば
と書きて、末はなし。その杯の皿に、続松の炭して、歌の末を書き継ぐ。

また逢坂の関は越えなむ
とて、明くれば尾張の国へ越えにけり。

斎宮は水尾の御時、文徳天皇の御娘、惟喬親王の妹。

昔、男がいた。その男が、伊勢の国に狩りの使いとして行った時に、あの伊勢の齋宮であった人の親が、「いつもの使いよりは、この人をよくもてなさない。」と言いつつ送ってあったので、（齋宮は）親の言葉であったので、たいそう丁重にもてなした。朝には狩りに送り出してやり、夕方は（男が）帰るたびに、齋宮の邸宅に来させた。このように、（齋宮は男を）手厚く世話をした。

二日目の夜、男は、無理に、「（齋宮に）逢いたい。」と言う。女もまた、あまり逢うまいとも思わなかった。しかし、人目が多いので、逢うことができない。（男は）正使である人なので、遠くにも泊めない。（男の部屋は）女の寢室近くであったので、女は（周囲の）人を寝静まらせて、子一つ頃に、男のもとにやってきたのであった。男は全く、寝られなかったので、（部屋の）外を見やって横になっていると、月（の光）がぼんやりしている中に、小さな幼い召し使いを先に立たせて、人が立っている。男は、とてもうれしくて、自分の寢所に（女を）連れて入って、子一つから丑三つまで一緒にいるが、まだ何事も語り合わないのに、（女は）帰ってしまった。男は、とても悲しくて、（そのまま）寝ずに過してしまった。翌朝、（男は女が）気がかりであったが、自分の方からの使いをやるわけにはいかないので、とても待ち遠しい気持ちで待っていると、夜がすっかり明けてしばらくたったところに、女のもとから、手紙の言葉はなくて、

あなたがいらっしゃったのか、（それとも）私が行ったのでしょうか、（私には）わかりません。（昨夜のことは）夢だったのでしょうか、現実だったのでしょうか。寝ていたときのことでしょうか、目覚めていたときのことでしょうか。

男は、ひどく激しく泣いて詠んだ、

（あなたと離れてしまった悲しみに）一面暗くなった心の闇に（私は）迷って（心が乱れて）しまいました。（ですから）あなたのご質問には答えられません。昨夜のことが（夢か現実かは今夜（もう一度こちらにおいでになって）は）つきりさせてください。

と詠んで（女に）贈って、狩りに出た。

（男は）野を歩き回るが、心はうつろで、せめて今夜だけでも人を寝静まらせて、一刻も早く会いたいと思っていると、伊勢の国の国守で齋宮寮の長官を兼任している人が、狩りの使いがいると聞いて、一晩中酒宴を催したので、全く逢うこともできなくて、夜が明けたならば尾張の国へ出発することになっているので、男も人知れず血の涙を流すが、（女に）逢うことができない。

夜が次第に明けようとするころ、女の方から出す（別れの）杯の皿に、歌を書いて出した。（男が）取って見ると、

歩いて行く人が、渡るけれど（衣の裾が）濡れない川（のような浅い縁）なので（もうこれでお別れですね）

と書いて、下の句はない。その杯の皿に、松明の炭で、歌の下の句を書き継ぐ。

また逢坂の関を越えてきつと会いましょう

と詠んで（杯を女に返し）、夜が明けると尾張の国へ越えて行ってしまった。

齋宮は清和天皇の御代（の齋宮で）、文徳天皇の皇女、惟喬親王の妹（であった）。